

伝統工芸の振興に関する調査・研究 中間報告【要旨】

【1】経緯

- 中部5県の会員から「地域の伝統工芸の衰退が止まらない」「経済団体として盛り返しのために何かすべきではないか」といった問題提起あり。
- 伝統工芸はそれぞれの地域の「ものづくり」「歴史」「文化」そのもの、いわば「地域の背骨」と位置付けることが出来ると考えられるが、実態を調査、課題を深掘りし、「なにを、なぜ(何のために・誰のために)、どのように、守る・残すべきなのか」を研究することとした。

【2】伝統工芸は今、どのような状況にあるか・・・4～9月の活動の振り返り

経産省外郭団体である(一財)伝統的工芸品産業振興協会が公表しているデータ、および同協会・各県庁への個別ヒアリングにより把握出来た伝統工芸の状況は以下の通り。

1. 定義

経産大臣指定伝統的工芸品(以下伝産指定)232品目(2018年11月現在)と、都道府県等が指定した伝統工芸品(以下指定外)千数百品目に区分される。

2. 中部5県における伝統工芸品目数(全国伝統的工芸品総覧による2005年のデータ)

	長野県	岐阜県	静岡県	愛知県	三重県	合計
伝産指定	7	5	3	12	5	32
指定外	15	37	19	20	33	124
合計	22	42	22	32	38	156
(内企業数が1社)	(1)	(25)	(4)	(5)	(19)	(54)

*2005年以降は同基準で調査したデータがない(伝産指定については非公表)ため、最新状況の把握は困難
赤字はレッドリスト品目数

3. 生産額と従事者数の推移

全国の伝産指定品目について、最盛期(1980年頃)と2015年を比較すると、生産額は5400億円から1020億円、従事者数は29万人から6.5万人と、ともに約5分の1の規模に縮小しているが、ここ数年は横ばい状態である。

一方、指定外品目はもともと生産額、従事者数ともに非常に小規模(単純計算で伝産指定品目の16分の1)、多くが消滅の危機に瀕し、現に消滅した品目もある。

※消滅した伝統工芸品(6品目)
岐阜:大桑竹細工・郡上びく・菊花石加工品・ふじ細工 三重:桑名筆筒・浅沓

【3】なぜ伝統工芸は衰退してきたのか・・・12品目ヒアリングの結果

中部5県において、問題意識をもって取り組んだり先進的な活動をしている職人・組合・活動体などを探し出し、現地に出向いてヒアリングを実施した。またビジネス的視点だけではなく、デザイン思考、若者・女性目線(=ターゲット顧客と後継職人のなり手の両面)なども織り込むため、愛知県立芸術大学の白木彰学長の指導のもと、デザイン専攻の大学院生2名(草皆瑠花氏、杉浦なるみ氏)にも参画いただいた。

- 期間:2018年11月～2019年2月
- 対象:12品目…長野:木曾漆器、岐阜:美濃焼・美濃和紙、静岡:駿河竹千筋細工、愛知:有松鳴海絞・尾張七宝、豊橋筆、三重:伊勢型紙・伊勢一刀彫・伊勢根付・伊賀組紐・漆芸 および有識者:中川政七商店(奈良県に300年続く奈良晒製造問屋)

【復活に向けた5つの課題意識】 【ヒアリングを通して見えてきた要因】 () =関係するコメントを出した品目業者

1. なぜこれほどまでに伝統工芸品が売れなくなったのか。	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>ライフスタイルの変化</u>により、旧来タイプの工芸品を使わなくなった。 ・江戸期以降盛んに輸出されていたが、<u>円高以降輸出が激減</u> (美濃焼、静岡竹千筋細工、漆器、根付) ・<u>安価で品質が良く扱いやすい大量生産品・工業品がマーケットを席巻</u>し、伝統工芸品を駆逐 ・業界慣行等により、<u>産地や工芸品名を表示出来ず、市場に認知されにくいものあり</u> (豊橋筆、伊勢一刀彫) ・<u>原材料や工具の入手難</u>などによるコスト上昇 (漆器、豊橋筆、駿河竹千筋細工、伊勢一刀彫)
2. なぜ「家業」から「産業」への転換、経営の近代化が出来なかったのか。	<ul style="list-style-type: none"> ・産業化や経営近代化を<u>サポートする存在がない</u>。大学や企業が関心を示さない、行政や支援機関が一般の中小零細にかかりつきり、地域の理解や後押しが少ない、など ・産地に<u>リーダー的な人がいない</u>。 ・職人減少や高齢化などにより<u>産地組合が機能しなくなった</u>。 ・職人は制作に集中したいので、<u>経営・ビジネスにかけられるエネルギーが少ない</u>。(尾張七宝、伊勢型紙)
3. なぜマーケティングやサプライチェーン等の視点で取り組んでこなかったのか。	<ul style="list-style-type: none"> ・漫然と旧来品を作り続け、<u>誰が顧客でその人はどこにいるか、など意識した商品開発がされていない</u>。 ・<u>中長期の経営・事業計画というものがなく、気がついたら「売れなくなった」「原材料が入手出来なくなった」「特定の工程の職人がなくなった」という状況になってしまった</u>。(中川政七商店)
4. なぜ職人は後継者を育成しないのか。事業承継に消極的なのか。	<ul style="list-style-type: none"> ・職人が<u>事の深刻さを理解していない</u>(自分の代で途絶えても仕方ない、という感覚) ・<u>作るのが職人の仕事</u>という気質。<u>外向けに発信する・アピールするという意識が薄く</u>、ノウハウもない。 ・<u>金銭的</u>(給料が払えない)、<u>時間的</u>(制作の時間を指導に割けない)、<u>年長的</u>(自分の存命中に一人前に育て上げる自信がない)<u>な余裕がなく、弟子を取るのに躊躇</u>。(豊橋筆、伊勢型紙) ・<u>下手な技量の職人を残したくない、自分の家系以外に伝えたくない、というようなこだわり・気質</u>。
5. なぜ若者は伝統工芸に就こうとしないのか。	<ul style="list-style-type: none"> ・社会に出た若者の一定数が自然に伝統工芸に就業する、という<u>エコシステム的な人材の循環がない</u>。<u>人材のすそ野を広げるような教育のしくみになっていない</u>。また意欲あっても<u>低収入でやめてしまう</u>。(美濃焼、豊橋筆) ・養成校はあるものの、内容がカルチャースクール的で<u>修了生が就業・定着しないケースあり</u> (木曾漆器) ・子供が多くの時間を過ごす「<u>家庭</u>」の中に<u>工芸に慣れ親しむような環境がない</u>。(中川政七商店)

【4】中経連としてどのようなことが出来そうか・・・取り組みの方向性

ここまでの調査でわかったこと

- ほとんどが中小零細のため実態の把握が極めて難しい(体系立った統計データ、調査データが全くない)
- ここ数十年間の世の中の変化の中で失われた物は大きく、元通りに取り返すのは不可能(伝統工芸に限らず、一般工業製品、文化財保護等においても共通の課題)
- 現場(職人・組合・地域)の多くは当事者意識や意欲が希薄(それに気づいていない)

今後は、中経連(+芸大)だけではなく、当事者を巻き込み、踏み込んで取り組む必要あり

- 伝統工芸が置かれている状況の深刻さを皆で理解・共有
- 「自分達がなんとかしなければ」という意識を醸成しつつ、徹底的に議論
・・・「伝統工芸とは何か・なぜ必要なのか」および「何を」「誰のため・何のために残すべきか」の認識の共通化
- 5つの課題解決に向けた対応策について、方向性を検討
 - ・「伝統」という言葉に過度に縛られることなく、「産業振興」「地域振興」の視点で
 - ・「芸術作品として博物館入り」させるのではなく、「品のある洗練された暮らしの道具」として残す
 - ・一時しのぎの対策ではなく、「産業としての自立」と「人材エコシステム化」を念頭に

【5】2019年度の取り組み計画(案)

- 検討の場を立ち上げ・・・中経連内に「小委員会」を設立
 - 建設的・活発な議論が出来るよう、構成メンバーは、自分事として課題認識を持ち、熱意・意欲をもって議論に参加できそうな人に個別に参画依頼。5県のバランスも考慮しつつ、「現場の人」「当事者」を主体とする少人数(十数名程度)で構成
(人選案:各産地の職人・組合、中経連会員、地銀の地域創生担当、行政の担当、愛知県芸大、名古屋工芸高、など)
 - 半年間に5～6回の会合を実施し、対応方策案の骨子をまとめ、年度末に報告(春の地域産業活性化委員会)
- (イメージ) 若者主体の活動体をつくり、世界を相手に、持続的に、中部圏の伝統工芸の魅力を発信・アピール
- 調査・研究の継続実施
産地の実態把握や現場ヒアリングを継続実施し、さらに課題意識を深めるとともに、好事例のケーススタディ、マーケット側の調査等も実施(例:一般の人々を対象とした伝統工芸の意識調査、ライフスタイルやニーズについてアンケート調査)